

## FRONTIER SPIRIT の文學的表現

清 水 春 雄

## 序 言

Samuel L. Knapp が *Lectures on American Literature* の中で “You are aware that it has been said by foreigners, and often repeated, that there was no such thing as American literature.” と述べたのは 1829年のことである。その頃の年代としてはアメリカ文学の存在が、嘗に他國の人々ばかりではなく、アメリカ人自體からも獨自のものとして認められてゐなかつたのは無理もない。その後 American Romanticism の花繚亂たる時代、Hubbell や Matthiessen の稱へる所謂 American Renaissance の時期を経てゐるにも拘らず、依然として先の言葉がその儘に信ぜられ、アメリカ文学は久しく英文学の老舗の軒先暮しに甘んじてゐなければならなかつた。歴史性の欠けた纏まりのない國に、深い叡智の源泉は求め得べくもないと見限られてゐたのであらう。併し力のあるものは何時かは表現を求める。アメリカといふ廣大な地域に、民族の坩堝と譬へられるほどの雜多人種をかかへ乍ら、比較的短い年月の間によく之を纏めて一つの逞ましい力に溶けこましめた要因、即ち端的に云つて、今日のアメリカ精神を築き上げた要因は、何等か獨自の表現を持たねば已まなかつたであらう。一國の文学は國民精神の反映であると見られる限り、この要因は必然的に文學的表現を持つたに違ひない。このやうに考へて追求せられた要因が Frontier Spirit であり、その文學的表現として把握せられたものがアメリカ獨自の文學の誕生といふ事實である。

アメリカは十九世紀末葉から、現世紀の初頭にかけて Norris, Dreiser 等一連の自然主義作家の擡頭を俟つて、獨自の文學を持つ様になつたとも云はれて

る。併し主として社会悪の realistic な暴露描寫をこととし、而も決定論的な陰影に蔽はれた作品が、アメリカ文学の獨立期を飾るといふことは、今日の世界政局に於けるアメリカの地位から見て、まことに奇異の感を抱かせられる。彼等の pessimistic な傾向はアメリカの本質的なものの現はれと見られるであらうか。これは Frontier 消失感と財界不況から來た當時の國民意識の反映であり、一時的な姿ではないか。より重要なそして眞にアメリカ文学の傳統を形ち作る上に役立つ根本的な特徴は、彼等より以前に、即ちアメリカが一國の意識に目覺めて、独自の文化を持たんとする旺盛な意慾を示してゐる時代に現はれ始めてゐるのではないか。その時代こそ Frontier Spirit が昇華して文学的表現を持つた時代である。本稿では上述の如く Frontier Spirit が如何にしてアメリカ独自の文学を招來したかの経緯を述べ、同時にこの精神の影響として如何なる特徴が現はれたかを論じたいと思ふ。

アメリカ文学を見るのに、いつまでも歴史的背景を頼りに論じてゐるのは如何かとの評もあるであらう。たしかに文学は文学自體の問題として考へ、aesthetic な要素を第一義的なものとして見るのが本來の態度であらう。そして事實この様な觀點から今日アメリカ文学も研究批評せられ始めてゐる。これは一應成長した文学と認めてゐる事を示すものである。併し乍ら少くとも十九世紀末葉に至る迄のアメリカ文学を眺める場合に、歴史的背景や社会的環境を抜きにしては、正しい理解に達することが困難なのではなからうか。The Cambridge History of American Literature の編者が "To write the intellectual history of America from the modern aesthetic standpoint is to miss precisely what makes it significant among modern literatures, namely, that for two centuries the main energy of Americans went into exploration, settlement, labor for subsistence, religion, and statecraft." と述べてゐるが眞に聽くべき言葉であると信ずる。

## I

アメリカ文学史を説く場合、主なる要因として通例 Puritanism, Frontier

Spirit, Romanticism 並に Realism の四つが數へあげられてゐる。このうち Frontier Spirit を除いた他の三者は、何れも基本的には歐羅巴にその源をたどることの出来るものであるが、ただ Frontier Spirit のみはアメリカの地理に由來するものであつて、これこそ生粹のアメリカ的要因である。しかもそれが歐洲渡來の他の要因をアメリカ的に色濃く染めずにはおかなかつた所に、Frontier Spirit の重要性がある。

Frontier Spirit を生んだ地理的環境、それは Frontier の存在であるが Norman Foerster が “The Frontier is American—is the key to the definition of ‘Americanism.’ In race and tradition we are fundamentally European, but our geography is our own, and the consequences of our geography can scarcely be exaggerated.” (*Factors in American Literary History*) と云つてゐるやうに、この地理的環境の特異性に留意せずにはアメリカを理解することは困難である。Frontier の消長が歴史家の研究對象として問題になつたのは、1893年に Frederick J. Turnerが “*The Significance of the Frontier in American History*” といふ論文を、Chicagoで催された American Historical Association の会合に於て發表したことに始まるのであるが、爾來 Parrington, Blankenship 等もこれに深い關心を示し、Calverton も “It was the frontier force which created a new America. It was the frontier which freed America from the cultural bondage of Europe.” (*The Liberation of American Literature*) と述べてゐる。

ここに Frontier といふのは Pioneers—Whitman や Cather が “O Pioneers!” と呼びかけてゐるその Pioneers—の活動舞臺を指すのであつて、國境とか軍事的な境界線の意味ではない。アメリカ大陸發展の歴史に於て絶えず西へ移動しつづけた所謂開拓者西漸運動の第一線地帯であつて、わが國では「邊境」とか「開拓線」等と譯されてゐる。Blankenship の定義によれば Frontier は “a moving line of settlement with the uninhabited public domain before it and the settled country behind” (*American Literature*) である

が、Hubbellの説明では“The American frontier is (or was) the no man's land which separates civilization from savagery” (*Reinterpretation of American Literature*) とあり、更に經濟史家 H. U. Faulkner の説く所に従へば「Frontier は専門的に云へば一平方哩につき二人以上六人以下の住民を有する地方」(*Economic History of the United States*) といふことになつてゐる。この様に定義されると地理的概念としては一應判然となるであらうが、いづこの民族にも二三の後光の射した言葉があるやうに、アメリカ人にとつて Frontier といふ語は、上のやうな一片の定義づけで納められる言葉ではなく、もつと廣い心理的な含みが伴い、謂はばパトスの契機を多分に持つたものである。

Frontier の西漸運動は大西洋岸植民の初期から初まつたのであるが、植民地時代には其速度は比較的遅々たるものであつた。假りに1620年に植民が始まつたと見て、西漸のリズムに従つて時代分けをしてみると、沿岸期 (Tidewater Period 1620—1700)、丘陵期 (Piedmont Period 1700—50)、通路發見期 (Pass Period 1750—80)。獨立後は加速度を以て進み、十九世紀中葉には Mississippi を西に渡つてゐる、之が中西部期 (Middle West Period 1780—1850)、1848年に加州に金鑛熱が起つてからは西漸のコースは一躍太平洋岸まで飛んで暫くは鑛山期 Mine Period 1850—70) を劃した。鑛山熱の下ると共に残された中間地帯たる Rocky山麓地帯を埋め cowboy で知られる long drive の時期となるが、之が約二十年に亙る草原期 (Prairie Period 1870—90) であつて、全部で六期に分けることが出来る。Indian Territory として残されてゐた土地の解放による最後の自由地獲得の熱狂的な場面は、1889年四月二十二日の出來事として Edna Ferber の筆になる *Oklahoma Land Run* に鮮かに描かれてゐる。かくして1890年迄に Frontier が消滅すると共に移民の西漸運動は終つたのであるが、約270年の久しい間アメリカ人の眼前には常に Frontiersmen の活動舞臺が開けてゐたのである。個人の前途に無限の可能性を望み見る大陸は、限られた土地と因襲に囚はれて身動きもならない舊世界の人々にとつては既に一つの Frontier をなすのであるが、更にアメリカの東海

岸地方に定着した人々から見て、西の空には常に希望の窓が開けてゐた。アメリカ人にとっては Frontier といふ語は時に象徴的に「西部」といふ語と同義語として用ひられ、幸福と富の約束を意味した。

併し荒野開拓の業は決して容易なものではなかつた。フランスの勢力を打ち破り、英本國の干渉を斥け、後には東部の保守的立法者との抗争を余儀なくされた開拓者は、あくまで獨立自由を愛し冒險進取の念に溢れてゐた。自然の猛威と戦ひインディアンや野獸の襲撃に抗して、彼等は堅忍不拔の精神を樹ゑつけられた。Frontier の生活に必要なものは實力殊に體力である。血統や昔の地位財産は殆んど無意味であつた。經濟的向上の道は獨立自尊の精神に俟たねばならなかつた。併しその精神と體力とのある限り極く貧乏な者と雖も成功の機会があつたのである。ここに傳統に囚はれぬ自由と樂天的自信深さから來る獨特の個人主義思想が生れた。それと共に同じ條件のもとに同じ困難に打ち克つて、人々は自分自身の價値を判斷させられ、隣人に對する強い平等意識と協分意識が現はれた。特色あるアメリカ・デモクラシーの精神はこの平等協力意識を母胎として生れたものである。更に Frontier の素朴な生活は單純明朗、自發的な氣質を作ると同時に、不安定な生活からは多分に投機的な傾向と落付かなさが生れた。緻密な理論的分析を嫌ひ極めて實際的でもある。何事にも先例舊慣を墨守せず、本能的に自信を有し、徹底的に樂天的である。Frontier に養はれたこの精神を Turner は Frontier Spirit 又は Pioneering Spirit と名付けて、所謂アメリカ・タイプはこの精神の産物であると唱へた。

かかる環境を持つたアメリカが、封建的な舊大陸とは異つた独自の文化を生み出すのは當然である。しかし政治的には1776年に獨立したこの國も、文化的には猶長く歐洲への隸屬状態にあつた。独自の國民文化を建設せんと欲求は十九世紀に入ると共に次第に強まつたのであるが、その欲求が確固たる信念を以て叫び出されるには Emerson の出現を待たねばならなかつた。この文化的歐洲依存の鐵鎖を斷ち切れとの雄叫びは、彼の所論に繰り返し聞くことが出来る。Whitman を除いて Emerson 程強く Frontier の影響力を感じてゐた人はない。博学なる Emerson をこの一面からのみ律しようとは企てないが、彼

の超絶哲学の中心は、この Frontier の影響が生んだ個人主義であると考へられる。彼の理念でアメリカ思想に影響し今日に至る迄アメリカ知識人を惹きつけ續けてゐるものは、この Frontier より彼が受けたものであつて、他から根源を得たものではない。彼の樂天主義、民主々義の辯護、個人への信頼感、獨立自尊の強調、教会制度よりも個人の内觀を重視するその宗教觀等皆 Frontier の存在によつて彼の心に生み出されたものである。

Emerson は西部の原始的な生活に、新生活や新民族の逞ましい發生を認め歐洲的軌範を脱しその隷屬を免がれしめるものは西部の力のみであるとして、それが文学の世界に齎すべき影響を確信した。「アリゲ＝山脈迄は歐羅巴の延長であるが、それを越えて初めて眞のアメリカが存在する」といふ彼の有名な言葉は、東部は英國の模倣である事を指摘したものである。彼は次のやうに説いてゐる。

Our day of dependence, our long apprenticeship to the learning of other lands, draws to a close. The millions that around us are rushing into life cannot always be fed on the sere remains of foreign harvests. (*The American Scholar*)

We will walk on our own feet; we will work with our own hands; we will speak our own minds. (*ibid.*)

The imitation is suicide. (*Self-Reliance*)

Why need we copy the Doric or the Gothic model? Beauty, convenience, grandeur or thought and quaint expression are as near to us as to any. (*ibid.*)

- Why should we grope among the dry bones of the past, or put the living generation into masquerade out of its faded wardrobe? .....There are new lands, new men, new thoughts. Let us demand our own works and laws and worships. (*Nature*)

この逞ましい新大陸の聲を盛る彼の文體そのものは、舊來のイギリス型の典雅なものではあるが、併しアメリカ文学獨立の提唱者としての彼の地位は重要

視されねばならぬ。尤より Emerson 以外にも西部の力を感じてゐる人は尠くなく、彼のみ時代意識に隔絶した一人ではないのであるが、全く material な事情を spiritualize した所に彼をして時代の哲人たらしめた所以がある。

彼以外にも Cooper, Hawthorne, Thoreau 或は Bryant, Longfellow, Lowell 等いづれも新大陸の鼓動に無關心ではなかつた。併し独自のアメリカ文学の型を打建てんとした衝動に驅られつつも、なほよくその希望を實現し得なかつた理由は Hawthorne の次の言葉が説明するであらう。

No American publisher would meddle with an American work; seldom if by a known writer, and never if by a new one—unless at the writer's risk. (*The Liberation of Amer. Lit.*)

この writer's risk を敢て冒した新人は、アメリカ文学獨立の祖として崇められてよい筈である。その新人こそ民主々義詩人と自ら銘うつて出た Whitman である。Emerson の獨立の提唱に應じて Whitman は *Leaves of Grass* の中で高らかに歌ふ。

Away with old romance!

Away with novels, plots and plays of foreign courts,

Away with love verses sugar'd in rhyme, the intrigues, amours of idlers,

Fitted for only banquets of the nights where dances to late music slide,

The unhealthy pleasures extravagant dissipations of the few

With perfumes, heat and wine, beneath the dazzling chandeliers.

(*Song of the Exposition*)

America brings builders, and brings its own styles.

The immortal poets of Asia and Europe have done their work and pass'd to other spheres,

A work remains, the work of surpassing all they have done.

(By *Blue Ontario's Shore*)

Thoreau が Emerson の主張を Walden の森に行動を以て實踐した如く、Whitman は Emerson の主張を作品に於て實踐したのである。Emerson は *The Poet* に於て「アメリカは雑多な生活現象を文学の素材として豊かに持ち合せてゐる。然るにそれらに表現を興へた文人は未だ一人も現はれてゐない。併し乍らやがて間もなく現はれるであらう」と云ひ “America is a poem in our eyes; its ample geography dazzles the imagination and it will not wait long for metres.” と述べてゐるが、その期待は “These States are the amplest poem.” (*By Blue Ontario's Shore*) と讃へる Whitman によつて見事に成就されたのである。

*Leaves of Grass* 全篇に漲る彼の信念を要約すれば次の様になる。「個々の人々、平凡なるものにも意義を認め、それらの自覺によつて舊傳統舊制度を打ち破り、凡ての束縛を逃れ、ただ大愛のきづなによつて結ばれて、互に手を取り自由平等の基礎の上に融和した一國家を築き上げよう。文藝の世界に於ても歐洲的舊文藝より脱却し、平凡にして而も現在のなわが國日常茶飯事の中に美を見出し、アメリカ独自の文化を打建てよう」。事實沙翁を含めて英國の大詩人の文学は殆んど宮廷の文学であり、少くとも上層富民階級の文学であつた。Whitman は廣く民衆を歌つた。貧富貴賤の別は彼の目に階級差としては寫らなかつた。人種國別職業別等も問題でない。凡てが友愛の對象となり、彼は万人に對して親しく呼びかけ、各個人の魂の自覺とその親しき觸れ合ひによる民主的な世界を築かうとしてゐる。Emerson が *The American Scholar* の中で「崇高にして美しきものの代りに、手近かなもの低きもの平凡なるものが探られて詩化される事を喜ぶ」と云つてゐるが、それに和して Whitman は

In the labor of engines and trades and the labor of fields

I find the developments,

And find the eternal meanings.      (*A Song for Occupations*)

Crowds of men and women attired in the usual costumes, how  
curious you are to me!

On the ferry-boats the hundreds and hundreds that cross, returning home, are more curious than you suppose.

(*Crossing Brooklyn Ferry*)

と親しげに誰れ彼となく呼びかけてゐる。

彼は開拓者の舊慣に囚はれぬ自由奔放さをその詩形に移して、舊來の英詩の傳統を無視し、無韻無律破格の自由詩を歌ひ出した。庶民を歌ふのに衣冠束帯は無用のものと感じたのであらう。そこから内容と共に形式の自由が生れた。*Leaves of Grass* 各版の四百余の詩篇の中に、先人からの引例譬喩は一つもない。lowly type を歌ふのに舊來の權威に頼る要なしとして、彼自ら make no quotations and no reference to any other writers (*A Backward Glance o'er Travel'd Roads*) を標榜してゐる。邊境人に傳統が無意味なる如く、彼には詩の傳統が無意味に思はれた。植民地の荒さを彼は内容にも形にも盛つたのである。Basil de Sélincourt は “His (Whitman's) loudest and most insistent demand was for an art which should be native to America, which should have the pride, the fierceness and the candour of the only emancipated people of the world.” (*Whitman*) と評してゐる。

アメリカ文學解放の狼火は、かくの如くして Whitman の手によつて打ち上げられたのである。併しこれに對する反應は如何であつたか。當時のアメリカは歐洲の文化的羈絆を脱する準備がなかつた。この最初のアメリカ的作品たる詩集「草の葉」も、彼が愛する「はらからよ」と呼ぶその當の一般國民の目には、ただ醜くはびこる雜草としてしか寫らなかつた。西部精神を無遠慮に稱讚した彼の作品は、典雅な詩の傳統を尊ぶ人々には、そのアメリカ的粗野の故を以て輕蔑罵倒され、各方面から極惡の評をうけた。中にも奴隸解放詩を以て有名な Whittier の如きは、讀むに堪へずと「草の葉」を火に投じたと云はれてゐる。文人仲間も出版業者も一般民衆もこぞつて彼の作品に反對した。彼の死後出版された傳記によつて明かにされたことであるが、*Leaves of Grass* への世間の反對を豫期して彼は三通の長い解説的讚辭を自ら用意し、有力新聞に送

り匿名で書評を出して貰つた。その書き出しは “Self-reliant, with haughty eyes, assuming to himself all the attributes of his country, steps Walt Whitman into literature, talking like a man unawared that there was ever hitherto such a production as a book or such a being as a writer …… Of pure American breed, large and lusty, age thirty-six years, — never once using medicine — …… ” と自ら書いてゐる。彼は實際この通りの人物であつたに違ひないが、又この様に見られる事を望んでゐたことも判るのである。

當時その余りにもアメリカ的なるが爲に、自國に於て認められなかつた作品も、豫期しない舊大陸の作家の中に相當の理解者を得た。W.M. Rossetti の如きはイギリスで *Leaves of Grass* を出版する様に事を運んだ。その選集の序文で Rossetti は次の様に讃へてゐる。

“His (Whitman's) work is practically certain to stand as archetypal for many future poetic efforts—so great is his power as an originator, so fervid his initiative. It forms incomparably the largest performance of our period in poetry.” 又批評家の Edward Dowden, Robert Buchanan, Jon Symonds 等もその禮讃者であつた。Swinburne も後には態度が變つたが、最初は熱心な稱讃者であつた。蓋し封建的な歐洲には、この空虚な散文とも見られるものも、清涼解毒劑的效果があつたのであらう。ただ自國に於ても流石 Emerson は Whitman の天才を認めて *Leaves of Grass* 第一版を手にするや否や “I find it the most extraordinary piece of wit and wisdom that America has yet contributed. …… I greet you at the beginning of a great career.” と讃辭を呈してゐる。同時に遠く Carlyle へ一冊を贈つて “A nondescript monster which yet has terrible eyes and buffalo strength……and is indisputably American.” (*The Liberation of Amer. Lit.*) と推賞してゐる。この悪評であつた Whitman が二十世紀になつて認められ出したのは、國民一般の道德觀の變化の故もあらうが、眞の原因は國民意識の變化の爲である。アメリカは南北戦争迄は統一的全體と見做されな

かつた。而も全國民が一國民の精神に融合して國民的傳統に關心を持つ様になつたのは、米西戦争(1898)以後のことである。國民的傳統への關心がWhitmanの詩に「アメリカ的なるもの」の偉大さを認め出し、今日迄アメリカの classic としては最も人氣のある出版を繰返してゐるのである。

Whitman をアメリカ詩の最初の作家とすれば、散文に於けるかかる地位は Mark Twain に與へられなければならぬ。Mark Twain は父の一家が Tennessee の Jamestown から Mississippi を横ぎり Missouri 州の Florida に移住して五ヶ月後に生れてゐる。既に胎兒として幾山河を越え西漸運動に参加した彼が、Frontier Spirit の權化であることは容易に領かれるであらう。彼の傑作 *Huckleberry Finn* の主人公の性格は、正に Twain そのものを表はしてゐる。自由の天地を求めて千百哩の Mississippi を筏で下る少年 Huck は西部の獨立精神の化身である。規則制度を蔑視し、舊慣に囚はれず、万事手近な實際的な方法で、臨機應變に行動する冒険好きで樂天的の少年 Huck Finn を Waldo Frank は the American epic hero と呼び Mark Twain の魂は偉大であると評してゐる。Twain の傳統無視舊慣打破の精神を、その處女出版 *The Innocents Abroad* に窺ふに、彼は同書の序文に於て

This book is a record of a pleasure trip ..... Yet notwithstanding it is only a record of a picnic, it has a purpose, which is, to suggest to the reader how *he* would be likely to see Europe and the East if he looked at them with his own eyes instead of the eyes of those who traveled in those countries before him.

I offer no apologies for any departures from the usual style of travel-writing that may be charged against me—for I think I have seen with impartial eyes, and I am sure I have written at least honestly, whether wisely or not.

と述べ、更に本文では

We visited the Louvre and looked at its miles of paintings by the old masters. Some of them were beautiful, but at the same time

they carried such evidences about them of the cringing spirit of those great men that we found small pleasure in examining them. Their nauseous adulation of princely patrons was more prominent to me and chained my attention more surely than the charms of color and expression which are claimed to be in the pictures.

と云つてゐる。かく彼は歐洲の藝術を嘲弄し巨匠を皮肉り、偶像崇拜的文化を彌次つた。併しこれは新しいアメリカを讃へる爲の單なる野蠻な偏見によるのではなく、Frontier が生んだアメリカ的デモクラシー觀に基くのである。Mencken の云ふ如く十九世紀に於ける Twain の人氣は主として舞臺上のユモリストとしてであつて、最初の間は Whitman の場合と同様そのアメリカ的作品は輕蔑された。Huck Finn は Concord の Public Library を始め二三の圖書館からも締め出しを食つてゐる。その理由は Whitman の作に於ける如く猥褻な箇所があるといふわけではない。妻の校閲が嚴重であつた Twain の作には sensual なりと非難を受けける面は全くないのであるが、彼の作の評者間に不評であつたのは、その英文学傳統の洗練優雅威嚴を棄てて、内容も用語も野生的な幼稚な迄に奔放自然なアメリカ人の精神を表はしてゐる爲である。彼の眞價が認められたのは同じく二十世紀に入つてからである。若い時代の樂天家であり人生謳歌者であつた彼が、Frontier の消失後即ち産業主義に全國民が壓倒せられてからは——他に家庭的な事情を始め種々の原因も考へられるが——悲觀論者に變り、爲に Calverton に「二人の Twain がある」と評せられてゐるが、今我々に興味のあるのは、この若い Twain 即ち *The Innocents Abroad*, *The Gilded Age*, *Huckleberry Finn* などを著はした Twain であつて、*What Is Man* や *Mysterious Stranger* の著者、老いたる Twain ではない。

## II

以上 Frontier Spirit の影響により、或は Emerson の獨立提唱となり、或は Whitman, Mark Twain の實踐となつて現はれた次第を述べたのである。一言にして云へば、アメリカ文学の獨立は Frontier Spirit の文学的表現

であると斷ずる事が出来るのである。Siegfriedが“*Qu'est-ce que l'Amérique?*”に於て云ふてゐる様に、一度生じたる人間の心理は、それを生んだ條件が失はれても永く消え去らぬものである。地理としての Frontier は失はれても、Frontier Spirit は容易に消えようとは思はれぬ。文學は國民生活を反映するものであるから、この精神がアメリカ文學の傳統構成に永く作用するであらう事は、想像に難くない。従つて獨立初期を代表するこれら三巨匠の作に表はれた特徴を理解する事が、彼等を源泉とする眞にアメリカ的な文學の流れを味ふ上に、大なる手助となるものと考へられる。

右の三者に共通の特徴として、最も強く感ぜられるものは、次の三點である。第一は樂天的であること。第二は平凡卑小なるものの意義を認めよと叫ぶ點。第三は自發性を強調すること。

先づ第一の樂天的であるといふ事について述べよう。

Emerson は *Nature* の中で“Who can set bounds to the possibilities of man?”と述べて、個人の能力に無限の可能性を信じてゐる。“Trust thyself” (*Self-Reliance*) との彼の教へは、ただその汝を宇宙の大靈と相通ふ心靈の所有者とし、宇宙の大靈の如く個人の soul も moral なものと無條件に信じてゐる場合にのみ云ひ得る言葉であるから、ここに彼の樂天性が底深く根ざしてゐることが解る。1872年、彼と Carlyle の三度目の会見の後 Carlyle が彼の印象を述べて “I am very happy to see Emerson again, but I can not deny that there is a striking difference between us now. He looks quite satisfied with life. It is a great wonder to see such a merry, self-confident person as he in the present world.” と云つたと傳へられてゐる。Emerson の樂天的なることに關しては既に定説のある所であるから多言を要しないであらう。

次に Whitmanの樂天觀は如何であらうか。36歳で初版刊行以來彼自身と共に成長した *Leaves of Grass* は彼の全人格を代表するものであるが、彼が ‘Poems of Morning’ (*A Backward Glance o'er travel'd Road*) であれと希つてゐる通り、昇る朝日の輝きに満ちた明るい詩のみである。彼の詩想の展開

は74歳の高齢で歿する迄素直にのびて何等の破綻を示さず、従つてその詩作にも特に時期を劃すべき変化を見出し得ない。終始一貫「のびゆく個人」が「友愛」に結ばれて「完全國家」たる「デモクラシー」を完成せんと理想を歌ひつづけてゐる。“喜びの歌”を歌ひ、新しき詩の“船出”を自ら讃へ、そしてやがて來るべき“後の世の詩人達”はわれを理解し得んと希望を失はず Strong and content I travel the open road. (*Song of the Open Road*) と彼は人生隨順、現實肯定の態度を以て進んでゐる。彼の詩には南北戦争の悲惨事に関するものを除いては、病氣とか老衰とか事業の失敗とかいふ日常の不幸を歎き歌ふものはない。彼の詩の分類は困難な問題であるが、David McKay 版 (1900年集録) *Leaves of Grass* の398篇について試みた所、その主要なる項目を拾つて見ると、友愛を主題とするもの58、新詩の發足を辨ずるもの30、西部意識の強いもの25、卑小なるものの意義を認めよと叫ぶもの25、自由、平等、民主々義等の語を表はして之等を讃へたるもの23、靈魂に関するもの21、死に関するもの19、生と死とを對照して歌へるもの8等があげられる。かくの如く死に関する詩も多いのであるが靈肉一體、万物不滅を信じてゐる彼には死の歎きはなく

I say distinctly I comprehend no better sphere than this earth,  
 I comprehend no better life than the life of my body.  
 I do not know what follows the death of my body,  
 But I know well that whatever it is, it is best for me,  
 And I know well that whatever is really Me shall live just as  
 much as before. (*On the Beach at Night Alone*)

と歌ひ、更に

My rendezvous is appointed—it is certain;  
 The Lord will be there, and wait till I come, on perfect terms;  
 (The great Camerado, the lover true for whom I pine, will be  
 there.) (*Walt Whitman or Song of Myself*)

とも歌つてゐる。死を恰も愛人との對面の如く譬へられ得る彼には、その他の

人生の悲惨事は格別咏歎の種にはならなかつたと見え、歎きの聲は聞かれぬのである。尤より彼が不幸に無關心であつたのではなく、その不幸の解釋が明るかつたのである。 *Song of Myself* の中に

I am the poet of the Body;

And I am the poet of the Soul.

The pleasure of heaven are with me, and the pains of hell are  
with me;

The first I graft and increase upon myself—the latter I translate  
into a new tongue.

といふ句がある。病弱の爲に他の文人仲間から救恤金の恵みを受けた時もある彼であることを思へば、その徹底した樂天詩人であることが點けると思ふ。

Mark Twain の樂天觀については、既に述べた通り若き樂天家の Twain と老いたる悲觀論者の Twain と全く別人の觀がある二人の Twain が考へられること、そして今問題になるのはこの老いたる Twain、成功した Twain、若い日の信條を失ひ救ひ難い厭世觀を暴露してゐる彼ではなく、若い Twain、西部の子、Frontier の權化たる彼であることを述べれば足りると思ふ。Pilot を愛し鑛夫を愛し一般大衆の日常事を愛し、人生の謳歌者たりし彼、子供らしい誇りを以てなつかしんだ國土への歸依者であつた彼、この若い Mark Twain が樂天家であつたことには異論がないであらう。

次に第二の特徴たる平凡卑小なるものの意義を認めよと叫ぶ點に就き考へ度い。

Emerson は *The American Scholar* の中に於て

I ask not for the great, the remote, the romantic…… I embrace  
the common, I explore and sit at the feet of the familiar, the  
low.

と云つてゐる。彼は學問に於ても宗教に於ても因襲に囚はれることに反對して個人<sup>\*</sup>の靈の權威を説き

The foregoing generation beheld God and nature face to face;

we through their eyes. Why should not we also enjoy an original relation to the universe? Why should not we have a poetry and philosophy of insight, and not of tradition, and a religion by revelation to us, and not the history of theirs? (*Nature*)

Nothing is at last sacred but the integrity of your own mind.

(*Self-Reliance*)

と各個人の靈性の目覺めを要求してゐるが、ここに求められてゐる個人は common man なのである。又

Man is surprised to find that things near are not less beautiful and wondrous than things remote. The near explains the far. The drop is a small ocean. (*The American Scholar*)

In every landscape, the point of astonishment is the meeting of the sky and the earth, and that is seen from the first hillock as well as from the top of the Alleghanies. (*Nature*)

と云つて手近かなものを疎んずる勿れと戒めてゐる。彼の寓話詩「山と栗鼠の口論」では、“お山は如何に圖體が大きくとも栗の實一つ割れまい”と栗鼠に氣焰をあげさせて、common man と雖も夫々才能の違ひを上手に展ばしてゆくならば、いづれも價值ある生活の出来ることを説いてゐる。

Whitman は民主々義詩人と自ら銘うつてゐるので、平凡なものを重視したのは當然であるが

I raise a voice……

To exalt the present and the real,

To teach the average man the glory of his daily walk and trade.

(*Song of the Exposition*)

と歌つてゐる。Emerson に於ける common man が Whitman では average man に代つてゐる丈である。彼のこの考へを表はす句を *Leaves of Grass* の中から拾つて見よう。

I do not doubt but the majesty and beauty of the world are

latent in any iota of the world; (Assurances)

I believe a leaf of grass is no less than the journey-work of  
the stars. (Walt Whitman)

I swear I think now that everything without exception has an  
eternal Soul! (To Think of Time)

Brave, brave were the soldiers (high named to-day) who lived  
through the fight;

But the bravest press'd to the front and fell, unnamed, unknown.  
(The Bravest Soldiers)

かういふ考へは *Carol of Occupations, Unnamed Lands*) にも明かに表はれてゐる。彼の多數の詩篇の中に引例の意味では、古今の聖賢、大詩人の誰一人も利用されてゐないことは前に述べたのであるが、これは彼の所謂普通のものを尊ぶ考への現はれである。Homer や Shakespeare や Tennyson の名を書き連ねた箇所はあるが、併しそれは彼等を大詩人として名を擧げて見ただけであつて、決して過去の權威に背景として頼つたのではなく、すぐ彼は語をつげけて

These, these, O sea, all these I'd gladly barter,  
Would you the undulation of one wave, its trick to me transfer,  
On breathe one breath of yours upon my verse,  
And leave its odor there. (Fancies at Navesink)

と歌つてゐるのである。即ち彼は詩の傳統に頼るよりも、海の自然のリズムに乗る事を喜び「この世の海の船乗りとして世のすべての港々に立ち寄らう」(*Poem of Joys*) 「かつてどの船人も敢て行かなかつた所へ航海しよう」(*Passage to India*) と彼はその新しい詩の船出に胸ふくらませてゐる。時にキリストやソクラテスの名が擧げられるとしても、それは彼等の metaphysics の基礎は人々の僚友愛にあるとして、彼の所謂 Athletic love of men 即ち大愛の強調の爲に言及しただけである (*The Base of All Metaphysics*)。John Balley はその著 *Walt Whitman* に次の如く述べてゐる。

When Whitman brought the average man into poetry he was only advancing in a path first cleared and levelled by Wordsworth ..... He believed in ordinary life and the average man, and loved them as no poet had ever loved them before.

Mark Twainの平凡卑小なるものへの見方はどうであらうか。*The Innocents Abroad* に傳統無視の精神が横溢してゐることは前述の通りであるが、彼の自傳的要素の多い *Huckleberry Finn* の中で Tom Sawyer が book learning を振り廻して先例舊慣を尊重しようとするのに對し、Huck Finn は出来る丈簡単な手近かの方法で万事を片付けて行かうとする態度に、彼の平凡性重視の考へが察せられる。元來 Mark Twain の身邊には相當の貴族性があつた。彼の母は Kentucky 出身であるが、もとは英國貴族 Earl of Durham, Lambton の流れである。母はこのことを常に意識してはゐたが、ただアメリカ的環境に合せて決して人前ではその意識を現はさなかつた。母の従兄弟の James Lampton は *The Gilded Age* の主要人物 Colonel Sellers として、盛に貴族の御曹司らしい人の好さを發揮してゐる。Twain の父方の祖先 Clemens の一族には James I 時代 Spain 大使となつた人もあり、又 Charles 王を死刑に處する場合の法官の一員であつた人もあると彼の自叙傳に述べてゐる。Twain はこれらの身邊にある空虚な貴族性の名残り、現實のアメリカ自然の粗放さとの間に起る矛盾に先づ Humor を感じ、それが彼の Humor 文学を築き上げる土臺の一になつたと考へられる。自己がアメリカ的環境の故に貴族性を全然持ち合はさぬ所から、未だ封建性に囚はれてゐる人々や制度を嘲笑する心持が現はれたのである。彼は世襲制度の故に 900 年間土地を持ちつづけてゐた母方の伯爵の身分など、何等尊敬の價値なしとしてゐるのである。併し母その人に對する彼の敬愛の念は極めて深く、彼が自叙傳中この母の話し振りについて叙べた箇所がある。

She never used large words but she had a natural gift for making small ones do effective work.

と母の天分を讃へてゐるが Twain が以て範とした所であらう。

次に第三の特徴たる自發性を強調することについて述べよう。

Emerson は“偉大なる藝術作品は他人の意見に煩はされず吾々の自發的な印象 our spontaneous impression を忠實に固守する所から生れる”(Self-Reliance)と云ひ、個人の自由な意志を尊んで“舊い慣習や傳統や權威に頼らず己れの心の公正なる判断から自發的に生れ出る創造的な言動を尊べ”(The American Scholar)と説いてゐる。Emerson doctrine の根幹たる自己信賴の理念について考へて見るに、この信條の基礎は天賦の才能への依存にあるのであるが、その天賦の才能の働きは自發的なものであるとして彼は spontaneous に表はれる primitive wisdom 即ち直感の叡智が、其後の訓練による教へ込みによつて禍ひされないことを希つてゐる。彼は凡そ original な action のもつ魅力は、結局その spontaneity にありと論じてゐる、常に自發的であれと云ふ事は、時と所とに應じて或は首尾一貫を欠き矛盾を生ずる虞れが多分にある。事實彼のエッセイの多くは散歩の折々に書きとめた Thought book から綴り合せたと云ふてゐる通り、その論の中には矛盾が多いと批評されてゐるが、之に對して彼は矛盾何ぞ恐れんや、かくの如きはただ檢微鏡的批評のみ。一個の意志より出てゐる限り、思想の高所より見る場合、その言語は何れも結局調和を保つてゐると辯駁してゐる。

自發性が Whitman に如何に強調されてゐるかは、その破格の自由詩形が雄辯に説明してゐる。彼にとつてはアメリカといふ新しい酒を盛るには、英詩の傳統的な rhyme や metre や stanza は余りにも古い革袋であつた。彼も初めは韻律格調を守つた定型詩に依つてゐたのであるが、西部を旅行し植民地の荒さを體驗した後は、眞にアメリカ的な文學を建設せんと意欲に燃えて *Leaves of Grass* に斷然新機軸を出したのである。Sélincourt は彼の破格の詩型を辯護して“彼は機械的な metre の形式をとらぬ。我々は感情をこめてものを云ふ時、或る言葉は重々しく澁り、或る言葉は軽く數語かためて云つてのける。韻を踏んだ詩の各行はただ型丈の一致であるが「草の葉」の各行は内容の重さに一致がある”と云ひ、その粗雑な用語についても“洗練された用語では spontaneous な feelings を表現出來ない (Whitman) と評してゐる。Long

Island の海近く育ち、海の spontaneous なリズムを愛した彼は、これを詩形にとり入れたといふ事は前に一言したのであるが、如何に海を好んだかはその「海」といふ語を用いた頻度からも察せられよう。Leaves of Grass 中に海 the Sea なる語を明らかに出してゐる詩は80篇。船 Ship 或は航海 Sail の語に代へてゐるもの15篇。合せて95の詩篇、即ち Leaves of Grass 四百余の全詩の約四分の一に及んでゐるのである。自發性につきものとも云ふべき矛盾についても彼は昂然として歌つてゐる。

Do I contradict myself?

Very well, then, I contradict myself;

(I am large—I contain multitudes.)

I concentrate toward them that are nigh—I wait on the  
door-slab. (Walt Whitman or Song of Myself)

Mark Twain の spontaneity は如何であらうか。彼が七歳から十二歳迄の毎夏を送つた Florida 近くの叔父の農場は、彼を自然兒として豊かにのびのびとした性格に造り上げるのに恰好の場所であつた。従兄弟やネグロ達を相手にいたづらの仕放題とも云ふべき生活をした。思ひつきで行動することの好きな彼は、自叙傳第二卷にも “Complexities annoy me; then irritate me.” と云つてゐる。最もよく彼の spontaneous な傾向を表はしてゐる作品は、彼の自叙傳そのものである。普通の自叙傳とは全くその行方を異にして、思ひついた所の何か一つの event を中心に、暫くその周邊の事柄を描く書き方であるので時間や場所の連絡に系統的な連りが無い。その當座自分の興味を惹いてゐる事だけを書き續け、興味が薄れたならば、新しく自分の心に浮び出した事項に筆を轉ずるこの方法を “Finally in Florence, in 1904, I hit upon the right way to do an Autobiography.” (Mark Twain's Autobiography. II—Author's Note) と自讃してゐる。

自叙傳を書く程の老齡になつてさへかくの如くであるので、彼の若い時代の万事に spontaneous であつたことは察するに難くはないが、その少年時代の性格をよく傳へてゐる Huck Finn について見るのも面白い。Huck Finn が Tom

Sawyer と奴隸の Jim を、その囚はれてゐる小屋から救ひ出さうといふ場面である。Tom は國事犯の救出には作法があると古式にのつとつて、鞘入りのナイフで小屋の土を掘らうと提案すると、Huck は作法であらうとわからうとツルハンとこの場合にふさはしいものだ。僕は黒奴なり水瓜なり日曜学校の本なりを盗まうと思ふときは、それがうまく手に入りさへするならばその取る手段方法など何であらうと構ひはしない。偉い人が何と云はうと、本に何が書いてあらうと、僕は手取り早く思付いた方法に頼るのだと語つてゐる。又他の場面ではかう云ふてゐる。事をする場合、善惡の判斷について僕はもう考へ迷はぬ積りだ。これからはどちらでもその時々には便宜な方法を取る事にすると。Huck-Finnが多くの圖書館からしめ出しを喰つた理由の一は、HuckがLiarであることにあるが、實際彼はよく嘘を云つてゐる。43章の主なる event の凡てに嘘を云ふ場面が現はれてゐる。これは懸賞金附で探されてゐる彼としては必要なことでもあつたであらうが、一には臨機應變な自發性によるのである。彼は口から出まかせには次の通り自信があつた。知らない家に近づいて行く時である。“I went right along not fixing up any particular plan, but just trusting to Providence to put the right words in my mouth when the time come, for I'd noticed the Providence always did put the right words in my mouth if I left it alone.”

自發性につきものの矛盾はどうか。Mark Twain の大陸横斷記録たる *Roughing It* の第十二章に“ロツキー山脈の頂上で小学校時代の親友 John に偶然めぐりあつた。僕は印刷屋の三階の窓から下に居る John の頭に水瓜を落してやつて見事に命中させたことがあつたが、結局僕は損をした。第一水瓜をなくしたばかりでなく、John の友情を失つたから”と昔を懐かしむ所がある。この水瓜事件は彼の自叙傳第二卷に同じ場面が出て、ただ相手が自分の弟の Henry になつてゐる。落した後すぐ後悔してゐる所を見ると、同じいたづらを繰り返した様にも思へず、又 *Roughing It* は personal narrative であると斷つてある所から見て全くの fiction とも思へぬので、これらはいろ覚えの記憶により思付きで語つてゐるとしか考へられない。尙自叙傳第一卷の中に

於ても、彼の誕生地たる Florida の當時の人口について、1877 年の手記には 300 人足らずとあるが、1897—8 年の手記には人口 100 で自分の誕生によつて村は人口パーセント増加したと述べてゐる。A. B. Paine の Twain 傳によると、この村の當時の戸数は 21 戸とあるので、人口 100 の方が近いと思はれる。この時によつて 100 になり或は 300 になりなどする所に彼の思付き振りが窺はれるのである。彼が思付きのままに俗語卑語を織り混ぜて、瀟灑自在に自己の周邊を描寫する態度から、庶民生活を活寫する近代アメリカ文学の realistic な態度が生れたと考へられてゐる。今日アメリカ文学の最大特徴としてもてはやされる Hemingway 的技法——かの簡潔な会話のやりとりの間に説明なしに、細かな心理の動きを表現させてゐる手法も、もともとは *Huck Finn* の自在な会話にその源泉を見出し得るのである。

以上をもつて三つの特徴を簡単に述べたのであるが、Frontier Spirit といふ同じ要因によつて動かされたものである限り、これらが三者に共通に現はれたことに不思議はないであらう。ただ併し茲に見逃してはならない點が一つある。それは Frontier の存在が文学的に見て、東部人に對すると西部人に對するとで、その及ぼせる影響の現はれ方に相違があることである。具體的に云へば Emerson, Whitman 等東部人と、Mark Twain の如き生粹の西部人との間に、或る相違の見られる點である。

元來 Frontier はその初期から十九世紀の終りまでは流動し續けてゐた。新しい傳統を生み文化的核心を作るには、Frontier は余りにも漂蕩的で、不安定であつた。丸太小屋がやがて共同社会となり町となり市となる迄は、西部特有の文化は生れなかつた。即ち沸騰する西部の人々は、永らく reader でもなく writer でもなかつたのである。久しい間、讀みものと云へば選舉に關する印刷物か、宗教或は道德訓的な讀物に過ぎなかつた。西部が多少の落付きを見せた場合も最初は歐洲或は東部作家を模倣する作品が見出されただけである。併し西部の發達と共に、東部との利害反す經濟事情の爲に東部に對する反抗意識が生じ、文学作品にもこの傾向が現はれるに至つた。獨立意識、民主的平等感が西部市民をして、東部の booklearning gentry や所謂 culture に對す

る冷笑的態度を生ぜしめた。西部の新聞雑誌は、反英反東部熱を以て西部文化の確立を叫んだ。彼等は New England や南方文化の延長ではなく、彼等の土地に即し彼等の環境より生じ、西部の利益と理想を表はす、より自發的な文化を望んだ。西部は美辭麗句の場ではない。數ヶ國語を含む諸人種の鎔け合ふ坩堝、Fortune-hunting に夢中の群集に洗鍊された文化は用がなかつた。必要な文化は土に即したものであつた。これら西部作家の多くは貧窮の中に生れ労働に従事し身を立て、筆に自分の經驗を托するといふ人で、即ち自分の體驗に基く人生の現實、社会の實相を忠實に描寫せんとしたのである。ここから必然的に realistic な手法が生れた。この好例が Mark Twain に見られることは前述の通りである。尤も彼の手法は realistic であつても、それは尙夢多き Romantic Realism ともいふべきものであつて、Frontier 消失後の pessimistic な Realism とは區別さるべきものである。

後に至つてアメリカ独自の文學を生み出す勢力となる Frontier も、その初期に於ては文學的に殆んど意味がなかつたのである。併しそれ自體文學としては價值なく見える Frontier も、それが存在する事によつて東部の作家達に新材料たる native なものを豊富に提供した。併しその材料を扱ふ東部作家は多く開拓者生活の直接的經驗を持ち合せなかつた。従つて Pioneers の活動の舞臺たる Frontier を扱ふ態度は Hawthorne, Longfellow 等の作品に見る如く、空想的に傳説的に見られ romantic な傾向を持つに至つたのである。この意味では再々西部を訪れ、西部人の呼吸を身近に感じた Emerson や Whitman も樂天的な American Romanticism の流れの中にある事を示してゐる。Emerson が如何に過去を振り返るな、遠くを望むな、現實のもの、手近かなもの、普通のもの求めよと叫んでも、それは卑近なものが卑近なるがままに價值があるのではなく、すべてが彼の所謂宇宙の大靈と相通ふが故に尊く、個人も神も oneness の、それぞれの顯現と見る所に、彼の凡俗尊重も意義があるのである。彼が“The blue zenith is the point in which romance and realty melt.” (*Nature*) “In every landscape, the point of astonishment is the meeting of the sky and the earth.” (*ibid.*) と云ふのも、目に見え

ぬ青空の彼方、或は地平線の彼方、見得ぬ世界に神祕を認め、夢の世界に憧れる心のある事を示してゐる。即ち大靈を説く彼の神祕的な Romanticism を表はしてゐるのである。一口に Romanticism と云つても、その表はれには種々あつて、或は超自然力に對する憧憬とか、中世懐古、異國情緒の如く、時間的空間的にかげ離れたものに對する憧れ、或は美や自然に對する熱愛等もあるであらう。Emerson に於ては、その超絶哲学の基盤をなすと考へられる Over Soul への確信、従つて自我の肯定、自我主張の熱意、Whitman に於ては athletic love を繋ぎとしての Democracy への熱情等が彼等をして romanticist たらしめてゐるのである。これは云ひ様によつては遠くのもの高いものに憧れるとも云へるのであるが、併しそれは現在自分の住みなれた土地や時代よりかけ離れた遠い國とか古い時代への思慕とかいふ如く解釋せらるべきではない。否これは既に記した如く、彼等はかかる遠い古いものの權威に頼る勿れと云つてゐるのである。Emerson は *Art* の序詩に

Give to barrows, trays, and pans,

Grace and glimmer of romance.

と歌ひ、古い因襲的な詩題の觀念を棄てて、かかる生活の日常性に目を向けよと云つてゐる。Romantic でありながら、同時に生活の real な面に注意する態度が、Emerson や Whitman に表はれてゐるのである。そしてこの現實といふ意味に於ての realistic な面を持つ Romanticism の發生は Frontier Spirit の東部への影響即ち間接の影響であり、逆に Mark Twain 等に見る如く romantic な Realism を生み出したのは Frontier Spirit の西部への影響即ち直接の影響であると考へられる。而してかかる意味に於ての Realistic Romanticism より Romantic Realism への稚移過程の裡にアメリカ独自の文學が誕生を見たと解することが出来る。

Frontier Spirit の文學的表現も、考察の歩を進めて行くなれば、Frontier 消失後の同精神の消長に伴ふ影響も究めなければならぬであらう。例へば Steinbeck が *The Leader of the People* の主人公 Grandfather に西漸運動の終焉について、“There's no place to go, there's the ocean to stop

you. There's a line of old men along the shore hating the ocean because it stopped them.....Westering has died out of the people. Westering isn't a hunger any more. It's all done. It is finished.”と歎かしてゐるが、この Frontier 消失の哀感が第二次世界大戦前迄のアメリカ Realism の基調をなしてゐると考へるのも一つの見方である。更に又この Frontier Spirit が、地理としての Frontier を失つてゐる現世紀に至つても、なほ形を變へ、政治的に經濟的に或は廣く文化的な諸々の活動となり、新しい勢力扶植の地を求め續けてゐると考へるならば、その文學に及ぼす影響も蓋し甚大なるものがあるであらうと思はれる。併しこれらの問題に觸れることは他日の研究に俟たなければならぬので、本稿は論を Frontier の實在せる時期に限り、而も Frontier Spirit の影響がアメリカ文學の獨立を齎らしたと考へられる面のみを取扱つたものである。